

『チベットの大地へ』

和蔵一起／文＋写真　ブイツーソリューション

183頁　2010年11月　1300円（税別）

本書は6年間に及び中華世界で生活した筆者が、チベット世界への2度目の探訪を経てチベット支援活動に入り込むプロセスを日記形式で描いた旅行記である。チベットを訪れる外国人旅行者の率直な反応が刻々と記されておりおもしろい。旅行ルートは、青蔵鉄道に乗り入蔵し、ラサーシガツェーギャンツェーチョモランマ・ベースキャンプ―ネパールへ至る、云わばチベット旅行者の「黄金ルート」である。その後ダラムサラで狛下の説法を拝聴し、著者はチベット支援者となる決意をする。

この旅行記の特徴の一つは、この旅行の中で著者が「奇跡的」な自然現象との邂逅によって信仰心を獲得していく点である。もう一点は、旅行を通じて中華的な文化事象やインフラに対して次第に厳しいまなざしを向けるようになっていく点である。ただし本書の論調は親蔵／嫌中という二元的な嫌中論に絡めとられてしまっているようにも読める。従って、読み手のチベットに関する知識や経験の違いによって、本書に描かれるチベット像に賛同されるか否かは大きく異なるものとなるだろう。チベットに対する関心や支援自体は喜ばしい。しかしチベット支援の困難さはこうした見方からだけでは回収できない点にあることは周知である。とはいえこうしたチベットに対する純真こそが大きな力学を有していることも疑いない。その点で著者の旅行を追体験するのも悪くない。

杉田研人